

## はじめに

「これまでほとんど無縁だった異領域の研究から、新しい刺激を受けた」という声がようやくあちこちから聞かれるようになった。4年前に本特定領域が発足して以来、7つの調整班は活発に共同研究を行ってきた。また7回に及ぶ国際公開シンポジウムや雑誌『古典学の現在』（既刊4巻）、ニューズレター（既刊10号）なども力があつたと思われる。「異領域の古典学の連携によって古典学のあり方を刷新し、活性化をはかる」という「古典学の再構築」の目標は、徐々にではあるが着々と実現しつつある。参加諸氏の熱意に深く感謝申し上げる。

「古典とは何か」、諸文明に通じるかたちでこの問いに答えることは容易ではない。重要聖典は口承することを原則としたインドのような文明もあるから、書写文献に限らず口承文献が古典に収められることは言うまでもない。さらに図像や地図なども、そこに制作者の思想が読み取られる限り、従来文献に限定される嫌いがあつた古典学の対象を少し広げて含め入れられる余地がある。とはいうものの古典は本来、言語による遺産である。

古典が創作された当初あるいは継承される過程における各時代の人々の古典受容を解明するには、当時の政治や社会、歴史、人々の日常生活をつぶさに知ることが必要である。そのためには歴史学、経済学、考古学、民俗学、生物学などの周辺諸領域の手を借りることも必要であり、この意味でそれら諸学との交流は更に盛んになってもよいと思われる。しかしやはり古典学の本分は、原典解読にある。

インドにおいては、紀元前4世紀前後に、千年来の権威であつたヴェーダ聖典を否認する形で原始仏教が編まれた。それはまさに当時最新の存在論、認識論に基づいて伝統的祭祀思想を否定し、「遊行」の実践によって自己変革を志向する、個人主義、内面主義、実践主義に徹した革新的哲学であつた。しかしそれから4、5世紀後には、その原始仏教もまた教団の形骸化と社会への無関心を衝かれ、「信仰」や「慈悲」という新しい価値を掲げる大乘仏教に批判される。さらに数世紀後には、今度は大乘仏教が世界を否定的に理解する観念論という批判を受けて、ふたたび「祭祀」を復活し、それによって人の能力を開発して豊穡な生の実現をはかる密教によって根本的に揺るがされる。インドでは古来このように社会状況の変化に応じて古い古典を揺さぶりつつ新しい古典が新しい価値を標榜して生成しており、そこに込められた生きたメッセージを、継承の側面と対比して読み解くことが古典学の重要な任務である。

旧約聖書の世界にキリストが現われ、ユダヤ教の世界にマホメットが現われたことも、同じように見ることはできないか。古典から新しい古典が作られて行くダイナミズムとして、その断絶と継受が理解され得ないであろうか。

中国では社会倫理を支えた中国伝統の儒教と、個人の心の拠り所としての2宗教、すなわち紀元初頭に伝来した仏教と、ほぼ時を同じくして興起してきた道教の3者が長らく闘ぎあつたが、紆余曲折を経て仏教は極端に中国化され、儒教、道教の聖典が永々と2千年余の命脈を保っている。ヨーロッパ世界はより単純である。時代によって衰退・復活を繰り返しながら、そして互いに鎬を削りあいながらも一貫して聖書とギリシア・ローマ古典が、そしてそのみが権威を保ってきた。これら両世界においては時代と地域に応じて古典がどのように読まれてきたか、言い換えればその古典が何故読み継がれてきたかを明らかにすることが古典学の役割となる。

翻ってわが日本はどうか。社会的規範は中国文化に則り、宗教心は仏教と神道、感覚的世界は国産文学もあるが、やはり中国文学の影響が大きい。そして、他の世界にあつたような千年を超えて強力に影響を及ぼし続けたものはない。この意味において日本には古典らしい古典がなかつた、と言えるかもしれない。これは日本文明の大きな特徴であろう。ならば何故そうであつたかが問われなければならない。

古典学の役割は他にもある。ことにそれぞれの古典の現代的意義を問い、古典のなかに眠る新しい価値を発見することは重要であろう。しかしまた古典の生成と命脈に関してこのような俯瞰的視野から見直すことも、古典とは何か、古典が果たしてきた役割は何か、などの問いを問ひかけ、古典を新しい角度から読み解くうえで有効なのではなからうか。

平成14年1月

領域代表 中谷 英明